

造血幹細胞系のリセット機構解析

(研究期間：平成 13 年～ 17 年)

任期付研究員：石原 浩人 (広島大学)

総 評 (研究を終了するべき：計画を見直しても十分な成果が期待できない)

本研究は、造血幹細胞のリセット機構の解析を「ヘテロクロマチン制御機構」及び「細胞の運命決定維持機構」という視点で捉えることにより、造血幹細胞に存在する少なくとも 4 つのパラメーター (増殖・細胞死・分化・他臓器の幹細胞への脱分化) の制御を介し「なぜ幹細胞の運命は維持されるのか？」という問いに答えようとするものである。

本研究に関連して、Bmi-1 遺伝子が造血幹細胞の self renewal に重要であることが別途報告されるなど、本研究分野の進展は著しく、このような情勢変化の中で、当初の目標達成することは困難と考えられる。

これまでの研究については、途中段階ということもあり十分成果があるとは言い難いが、研究グループとしてはほぼ順調に研究が進捗しており、所期の研究計画は概ね適切であったと判断できるが、本研究における任期付研究員の寄与が不明確であり、任期付研究員が主体となり自立した研究が行われているとは評価できない。

また、上記のような情勢変化の影響もあるが、現時点では研究成果の価値や波及効果はあまり期待できず、情報発信はある程度行われているが、任期付研究員本人が筆頭著者となっている論文もなく、十分とは言い難い。本研究を実施する過程で任期付研究員の所属が 3 回変更になるなど、本研究員が主体となった研究を継続するには不安定な状況にあり、研究者本人も内科医として臨床対応に追われており、今後、当該研究を円滑に実施するには疑問が残る。

以上により、客観的な情勢が変化する中、研究グループとしてはほぼ順調に研究を進めているが、任期付研究員が主体となった自立的な研究活動が展開できていないため、計画を見直しても十分な成果は期待できないと評価せざるを得ない。 < 総合評価： d >

今後は、客観的な情勢変化を踏まえた研究計画の大幅な見直しが必要と考えられ、また、任期付研究員が主体となり自立的に研究を遂行する必要があるが、進展が著しく競争の激しい本研究分野で、任期付研究員のオリジナリティーを確保して本研究を継続し、残された研究期間内で十分な成果を創出することは期待できないことから、若手任期付研究員の自立的な研究活動を支援する本プログラムによる研究支援は終了することが適当であると評価する。 < 今後の進め方： d >

評価結果

総合評価	今後の進め方	目標達成度	研究成果				研究計画	研究者の自立性	任期制の定着への効果	所属機関の支援
			科学的・技術的価値	科学的・技術的波及効果	社会的・経済的波及効果	情報発信				
d	d	e	c	c	c	c	b	c	c	a